

# グレアム・グリーン試論

佐久間 信

## (一)

ロンドンのセント・ジェームス宮を取りまく美しい町。ヴイクトル・ド・パンジュのいう、「好奇心という貴重な才能をもつことができた人間のファンタジイを証する、あらゆる原産地とあらゆるマークのウィスキーの小びんのコレクション」があり、「徹底的に紫がかったイエーツ風の超現実的傾向の何枚かの絵」がかかった部屋の、一九〇四年十月二日バ「カムステッドに生まれた住人の心の大陸の地図を、それもまだ未創造の大陸すらある地図を、ひとに描かせる秘密は何であろうか。この陸地から、一九二五年の詩集「たわけの四月」を最初として産み出された鉱物が、われわれの生存に絶対不可欠なものであるからではなからう。その鉱物を産み出した土地の地質と、その地質を形成した宗教・人間・社会条件の因果関係を、ようやく人間的条件のみほぼ同一とする外国人が、僅かな共感と、多量の反撥を感じ乍ら、採り出し

てゆくとき、驚怖の念とともにひとに感じさせずにはおかない、このロンドン人の心の世界と、わたくしたちの直面しながらはならない世界との同一性こそ、その秘密ということができよう。

その世界は奇妙な世界である。おそらく、両極は酷暑の地であり、熱帯は酷寒の地であろう。この世界のもつ特異性は、一瞥にして看取される。「ものの本質」の冒頭で、作者はペギイの言葉を引用する。「罪人も、心の中ではキリスト教徒である——キリスト教の事がらに關しては、罪人ほどよく知っているものは誰もいない。聖者以外には誰もいないのだ」この言葉、この前提が、「ものの本質」という小説において証明され、その証明完了は、この小説第三の巻第二部の最終部においてあらわされる。自殺のために錠剤を一度に六粒づつ口にほうり込み、二口の酒でそれを飲み下し、死の雲が彼を襲って来たとき「彼は声に出して言った。『神様、わたくしは愛す……』だがその努力はあまりにも大きすぎた。

そして、自分の身体が倒れて床を打ったときも、彼はそれを感ずることはできず、メダルが金貨のように冷蔵庫の下にころがって行って、小さく、ちりんという音をたてたときも、それを聞くことができなかった——誰にもその名が分からない聖者の像のついたメダルが」ひとが、ひとであるがために、人間の法も、宗教的戒律をも犯し、絶対に救済不可能の大罪である瀆聖の罪を犯し、自殺（カトリック教にあっては、自殺は神の恩寵を信じない行為であるがために厳しく禁じられている行為であり、自殺した人間は、葬式の祈禱を受けないとはできない）に至り、しかも聖者でありうるかも知れぬという、怖るべき厳密な論理がここには展開されている。聖トマス・アキナスの体系的論理によって構築されたカトリック教のもつ論理性は、その宗教の影響下にある人間の思考の論理、発想法をつくりだし、自然な人間の感情、ヒューマニズムと激しく対立することになる。ヒューマニズムの虐殺、自身自身の虐殺の不可避なことの論証の痛ましき、いや痛ましきという感情的な言葉はこの場合不適當であろう、数学的厳密さ、を、グレーム・グリーンンの「もの本質」を中心に追って見よう。グリーンンという大陸の地質、思考の論理、は、ここにその本質を、もつとも明白に露出しているからである。

## (二)

アフリカの英領植民地のある日曜の朝、寺院の鐘は朝禱を告げている。高校の窓のところには、黒人の女子生徒が坐っ

て、針金のような髪にウエーブをかけようと際限のない努力をしている。おそらく、と、この書き出しのところでグリーンンは考えているらしい。おそらく、その針金のような髪には、ウエーブはかかるまいと。ウエーブは、朝禱の鐘であり、ヨーロッパ的思考であり、ヨーロッパ的正義であり、良心である。ウエーブはかからない。かけようとすると、良心や正義を与えようとすると、人間は滅びざるを得ないのである。この旋律は、社会的正義と神の義という主題のヴァリエーションで、グリーンンの作品のいたるところにひびいている。たとえば、「おとなしいアメリカ人」では、次のような文句にぶつかると。

「……イギリスにはもう自由党はなくなったが、自由主義はほかの全部の政党に伝染してしまっている。イギリス人は全部、自由主義的保守主義者か、自由主義的社会主義者かだ——つまり、みんな善意、良心を持っている。おれはむしろ搾取者として、自分の搾取したもののために戦い、それと運命をともしたいよ。ビルマの歴史を見たまえ。イギリスはあの国を侵略した、地方の諸部族がわれわれの味方をした、われわれは戦争に勝った——しかし、きみらアメリカ人と同様、おれたちはあの時代は植民地主義者でなかった。そうなんだ、おれたちは国王と講和をして、領地を返してやったから、おれたちの同盟軍の部族たちは、磔殺になつたり、鋸で体を真つ二つに切られたりした。土民たちは何の罪もない。彼等はおれたちがビルマにとどまって支配をつづげると思っ

た。だがおれたちは自由主義者で、良心にそむくのを嫌ったのだ」ヨーロッパの良心が、人間の生命を奪った、という事実の提示と同時に、それと並行して、今の引用文中の「きみらアメリカ人」の「きみ」即ち、「おとなしいアメリカ人」パイルの、自由のために行った罪なき人々の虐殺が語られる。パイルが反共第三勢力養成のためにアメリカから現地人に送りこむプラスチック爆弾は国立劇場前のガルニエ広場で爆発する。「おれたちは死を悼む人々の大集団の真只中に居た。警察は広場へ入ろうとするほかの人々をささげることができたが、生き残った人々やすぐに来た人々を広場から追いたてることには無力だった。医師たちも死者の面倒を見る暇がないほど忙しかったので、死者はその持主たちの手にゆだねられていた……。一人の女は彼女の赤児の遺骸を膝の上に抱いて、地面にすわっていた。一種のつましい気持から、彼女はその死児を農婦のかぶる麦桿帽で蔽っていた。彼女は静かに、黙っていた。そして広場でおれを最も強く打ったものは、沈黙だった。それはおれが一度ミサの最中に入った教会に似ていた——聞えるのは奉仕している人々が発する声や音だけで、そここで噎り泣いたり哀願したりしているヨーロッパ人だけが例外だったが、それも東洋的な謙譲と抑制と忍耐とに恥じ入るように、また静まってしまう。花壇の縁の脚のない胴体は、頭を切りとられた鶏のようにまだピクピク動いていた。」自由の価値を教え込まれ、無邪気にそれを信じて行動するアメリカ青年の行動の結果をみて、「おれ」と

いう、イギリスの新聞リポーターはこう思う。「言ったって何になる。この男はいつも無邪気なのだ。無邪気な者を批難することはできない。彼等はつねに罪がないのだ。押さえつけるか、消してしまおうか、それより手がない。無邪気は狂気の一種なのだ」「おとなしいアメリカ人」はヨーロッパの良心、アメリカの良心などが、無邪気に信奉された場合の悲惨を、むしろ外側から、というのは社会・政治的側面から構成してみせたものである。これに対し、「ものの本質」は、朝禱の鐘がなりひびき、また、港の護送船から高級船員が上陸してくると、学生帽をかぶった子供たちが忽ちとりまき、まるで子守歌のような調子で “Captain want jig jig, my sister pretty girl school-teacher, Captain want jig jig.” と繰り返し、彼等が立ち去ると意気揚々と二等水兵を女郎屋へと護送する、熱気と、雨季と、はげたかの支配する町の治安維持にあたる一警察副署長スコビーの、原住民・シリア人の実情を知りつくし、また、ヨーロッパの良心の、この風土における無力さを知れるが故の、内的な悲惨さの構築なのである。

「あそこを見給え、スコビーが来るぜ」

言われて、政府から内密の命令をうけ、この植民地の警察の仕事を探りにイギリスから派遣された男、ウイルソンは、「なんの興味も感ぜずに……その指さす方を眺め」る。トタン屋根の上では、はげたかが一羽はばたきをし、その位置をかえる。はげたかの姿は、スコビーの出現と、しばしばか

さなり合う。大罪を犯し告解の秘蹟をうけず聖体をうけ、地獄におちる運命を自ら選んだスコビーが情婦ヘレンのもとに、人気のない真昼間、ひとり車を駆って行くときには「ただ、はげたかばかりが外に出ていた——道の端の死んだ鶏の周りにむらがり、老人のような頭を腐肉の上にかがめ、破れた蝙蝠傘のような羽根をあちらこちらに拵けて」いる。腐肉をあさるはげたかであるべき、治安の維持者スコビーは、小説の時は流れるにつれ、はげたかにあさられる腐肉と化してしまふ。

ただひと言としてその言葉を信ずることができない原住民・シリヤ人たちに「正義」を行なう良心的役人スコビーの手錠をさびつかせ、オフィスの抽出しの中のロザリオを壊しておいたグレアム・グリーンは、法の人スコビーとその妻ルイズ、その情婦ヘレン・ロルト及び神で奏される四重奏の導入部として、実に巧妙な旋律を選んだものである。屋根には、はげたかがとまり、道には、ぶち犬の屍体が横たわっている植民地の、告発をすれば必ずといって良いほどしつぱい返しが起こり、その事件よりも一層醜い腐敗があることが指摘されるこの植民地の警察副署長は、しかし、この植民地を愛している。

「ぶち犬の屍体避けようとハンドルを切りながら彼は考えた。わたしは、何故、この場所が、こんなにいいんだらう。ここでは人間性を変装する暇がないからなんだろうか。ここでは地上の天国なんてことは、とても口に出せやしない

んだ。天国は死の向う側に厳然として存在し、死のこちら側では、もし他の土地なら人が賢明にもかくしておく不正や残酷な所業や卑劣な行為が榮えているのだ。ここでは人は、人間の悪のいちばんの深みを知りながら、ちようど、神が、人間を愛するように、人間を愛することができるとだ。ここでは、ポーズや、きれいな着物や、わざとこきえあげた感情なんぞは愛されないんだ」

醜悪な卑劣な裏切りを常習とする人間を、まさにかかるが故に、愛しうる、とスコビーは考える。そして、かかるもののみを、彼は愛しうるのである。醜悪は矯正されるべきものではないのだ。スコビーは年をとり情熱を失った「権力と栄光」の主任警部である。「精神のなかで、過去の過ちを調べあげ、一度ならずもその過ちを退治してゆく神学者」に比せられる「権力」のエージェント、主任警部は、あくまで、メキシコの腐敗の矯正のために戦い、この腐敗をもたらしたと彼の信ずるカトリック教の一切の追放に専念する。この自分自身にはきびしく、他人の墮落を容赦しない男は、きわめて人間的である。この人間的な執念を失い、腐敗を、醜悪さをもつままの人間を、あたかも、神の人間を愛する如く、愛しうる考えたスコビーは、当然、既に、人間的であることを放棄してしまつたと言えるのだ。スコビーは妻ルイズを「愛している」という。ところがスコビーがルイズを愛し「憐れみと責任感が情熱のような激しさにまで高まる」のは、モスリンの蚊帳を通して眺められる、アテプリンのよ

うに黄色い象牙色をした顔と、かつては、瓶詰め蜂蜜色をしてたのが、汗で黒ずみ、糸のように見える髪をした妻に對してなのである。「妻は蚊帳のなかに坐っていた。彼女は、一瞬間、彼の目に、蚊帳の下の大肉片のように見えた。しかし、その残酷な影像のすぐあとを追って憐れみの心が浮かび、その影像」はたちまち追いのけられてしまふのである。愛ではなく自己破壊的な憐れみの心を抱いて眺められるルイズは言う。

「……署長さんが隠退されて、あなたは後任になりそこねたんですってね」

スコビーが妻に言いそびれていた事実である。「私はもう二度とクラブに顔出しできないわ」ルイズに世間に顔出しできなくした責任と憐れみは、スコビーを、妻の希望をいれて、妻を何としても南アフリカにやる手はずを整えなくてはならぬ破目に追いやる。この金をスコビーはダイヤモンド密輸商人、ユーゼフから借りる以外に手がなかった。憐れみと、法的な非行の結びつきの第一である。

第二の結びつきは、ポルトガル船・エスペランサ号臨検の際に行なわれる。スコビーは、船長の娘に宛てた手紙をその巧妙にかくされた場所から発見し押収する。第二次大戦中のこととて、どんな秘密通信であるかわからないので、手紙は一切、そのままイギリスに送らなければならない。

「これは持って行かなくてはなりません。そして報告しなくては……」とスコビーは云った。

「この戦争、なんという、いまましい戦争だ」船長は吐き出すように言った。

「もちろん、われわれだって、好きで戦争しているわけはありませんよ」とスコビーは言った。「娘に手紙を書いたからといって、男が一人破壊しなくてはなんないなんて」「娘さんですって」

「ええ。結婚して、グレーナーという名になっていきます。封を切って、読んでごらんさい。お分りになりますから」

「私には、できないんですよ。検閲官にまかさないわけにはいけません。何故、リスボンにつくまで、書くのがお待ちになれなかつたのですか」

これ以上、自分の身体の重みを肩にささえていることができないかのうちに、その男は浴槽のふちにうずくまった。彼は子供のように手の甲で眼を拭きつづけた——魅力のない子供、ずんぐり太った小学生といった恰好である。美しいもの賢いもの、成功を収めたもの、こういった連中に対して、ひとは容赦ない戦いを挑むことができる。ところが、魅力をもたぬものに対しては不可能なのである。魅力をもたぬものに戦いを挑めば、胸に重石がのしかかる。スコビーには手紙をもっていかなくてはならないことは分っていた。同情したところで、何の役にもたないのである」この船長は、スコビーと同じカトリックである。彼は、自分と船長との間に、どれほど多くの共通点があるか、瞬時にして理解せざるを得ないのである。

手紙を罫に持ち帰った彼は、法を犯して、手紙を開封し内容を読んでしまい、それを引きさき、燃やしてしまう。醜い魅力のないものに対する愛は、スコビーに第二の非行を犯させてしまったのである。

第三の罪は、ユーゼフから借金をして、妻を希望通り南アフリカにやったのちに生じる。

潜水艦に沈められた船の生存者がスコビーの前に担架に乗せられて運ばれてくる。

「見る人を腹立たしくさせる患者が」一人あらわれてくる。

「疲労困憊がその顔を醜くしていた。皮膚は今にも頬骨の上でひび割れるかのようにであった……」「彼女は結婚したばかりです——航海前に。彼女の良人は死にました。旅券には十九才となっています……」

その指は一冊の書物を固く握りしめていた。

「これは何です」

「切手アルバムです」

醜いものに対する憐れみの情は、自動的にスコビーの心に芽生えてしまう。はげたかは腐肉をついばむのである。

しかし、スコビーと、この醜い、経験といえ、女学校のネット・ボールのチームにいたことだけというヘレン・ロルト夫人との間には、年令の相違からくる安心感があった。スコビーは、この、切手アルバムを唯一の財産として救われたヘレン・ロルトに郵便切手をもって来てやる。

ヘレンと共にいて、彼は長年の間感じたことのないような深い安心感を抱く。二人はお互に安全なのだ。「彼は三十才以上も年長であった。彼の肉体はこの気候のなかで欲情の感覺を失っていた。彼は悲しみと愛情とおそろしいまでの憐れみの心を抱きながら彼女を見まもった。いつかは、彼女にはその方向すらわからぬこの世の生きる道を、自分に示してやることができなくなると思ったからである。彼女が顔の向きをかえ、あかりがその顔に落ちたとき、その顔は醜くみえた。子供が、一瞬、ちらりと見せる、あの醜さである。その醜さは、両手額にはめられた手錠のようであった」この安心感には、「友情・信頼・憐れみという形であらわれる敵のカモフラージュであり」明け方の四時、スコビーが目覚めたとき、ヘレンは、傍に、逃げ出す途中で射殺された人間のように奇妙に窮屈そうな姿勢で寝ていたのである。

「罪と同時に責任も彼のものであった……。彼は自分の知っていることを知っていた。彼はルイズの幸福を守る誓いをたてていた。それでいて、今度は、もうひとつの、それも相矛盾する責任を引き受けてしまったのだ。いつかは、言わないわけにいけない様々な嘘のことを考えて、うんざりしてしまった。彼はまだ血を吹き出してはいない、こういった犠牲者たちの傷口を感じた。仰向けに横たわって、ねむれぬまま灰色の早朝の海を見た。この暗い海のおもてのどこかにルイズでもなくヘレンでもないもうひとつの犠牲が、もうひとつの自分の犯した罪がたゆとうている気がした。遠く町

の方では、雄鶏が夜明けと間違えて時を告げていた」ここに於いて、憐れみを主題とする、この変奏曲の主題が、再び新たな力をこめて奏されたのである。

カトリック教徒としてのスコビーの犯す罪は、人間の罪を自分の死によってあがなった、実際の肉体の存在であり、同時にその霊において神と不可分であるイエスの、切りさかれ、痛めつけられた肉体に更に、槍の一突きを加えることを意味する。この人間の罪を贖うためにその脇腹から血を流すイエスに対する、スコビーの憐れみは、次の様な形をとる。それは、論理的必然性をもったものと言ってよい。

彼とヘレン・ロルトとの仲のことを手紙で知らされたルイーズは南アフリカから戻って来る。一見、平凡な三角関係である。スコビーは苦しむが、その苦しみは、けっして、二人の女を同時に愛することの罪悪感からではない。結局、彼は、死を選ぶが、その死は、けっして、この二人の女にはさまれた自分が苦しくなったのではない。ルイーズは戻って来て、夫とヘレンとの仲を明かにするために残酷な試みを行わだてるのである。彼女は夫と一緒に聖餐式に行くことを主張する。病気を口実にスコビーはそれを一度は避けるが妻が自分のことを疑い出したことに気づくと、妻を苦しめるよりは、むしろ、神に苦痛を与えることを選ぶのである。神父に対し、ヘレンとの罪を懺悔し、赦罪されることなくして聖体を受けることを選んだのである。ヘレンを棄てることは出来ない。ルイーズを苦しめることはできない。この二人に

対しては彼には責任があり、あくまでも、護ってやらなくてはならないのだ。ヘレンとの罪を懺悔し、ヘレンとの関係を絶つことを誓わなければ、赦罪されることはできず、従って聖体を受けることは出来ない。聖体を受けることを避けければ、ルイーズは、当然、自分とヘレンとの間を察することになる。はつきり形を備えた女に、苦痛を与えることができぬスコビーの弱さが、瀆聖の罪へと必然的に彼を押しやり、自分から進んで地獄墮ちの宣告をうけるのである。ところがスコビーとは世界を異にするヘレンには、彼の苦しみなどすべて、偽りのものとしか映らない。三人の人間の間の、ヒューマンな三角関係と、三人の人間と神との間の四角関係との間の断絶の姿は、既にスコビーが瀆聖罪を犯し、署長の地位が約束され（瀆聖の罪を犯し、悪魔の一味となって始めて、ルイーズを喜ばせる署長の椅子が廻って来たのだ、とグリーンは書いている）たあとでのヘレンとスコビーとの思考の非交又に、明白に示しだされている。

「遂に、ぼくは署長にされてしまうことになったよ」

「奥さまがお喜びになることでしょね」

「そんなことは、ぼくには、関係ないさ」

「あら、大ありよ」有無を云わさぬ調子で彼女は言った。苦しんでいるのは自分だけ、これが、彼女の、きまった考え方のひとつであったのだ。スコビーはやがて、自制心を失って叫ぶ。「犠牲を払っているのは、なにも、君だけじゃないんだ」「ぼくは希望を棄てたんだ」

「わからないわ」

「ぼくはね、未来を棄てたんだ。自分で自分を地獄におとしたんだ」

「お芝居はやめて」と彼女は言った。「あなたのおっしゃっていること、わたしには、わからないわ。そうそう、あなたは、未来のことをお話しになってたのね——署長さんになりになることを」

「ぼくの言うのは、本当の未来のこと、永遠につづく未来のことなんだ」

彼女は言う。「わたしが、いやでたまらないのは、あなた、カトリック教なの。きつと信仰のお厚い奥さんをおもちのせいなんでしょうけどね。大いんちきだわ。もし、本当に信じてらっしゃったら、ここにいらっしゃるはずはないでしょう」

「だが、ぼくは、信じていて、そして、ここに居るんだ」と当惑しながら彼は言った。

「ぼくには説明がつかないが、その通りだから仕方がない。ぼくは、盲目じゃないんだ。自分のしていることは、ち

ゃんとわかっている」彼等の考えは、けっして交わることはない。

また自分の昇進をよろこび、幸福なルイーズは、スコビーの隣れみの対象であることをやめ、スコビーに取りのこされたのは狐独のみとなってしまう。

一方、ルイーズと共に聖体を受けに行くたびに、イエスの脇腹をつきさし血を流させ続けなくてはならないことに彼はたえられなくなる。

神を苦しめ続けることは、彼にはできない。神に対する隣み、Kyrie Elison 主よ隣れみ給え、は見事に逆転する。

神を苦しめないために、神に禁じられた自殺をせざるを得ぬ、それも、自分以外の人間には、自殺とは判らせない自殺を、完全犯罪のごとく行うこと、これが、神の愛を模倣した隣れみのもたらした論理的帰結であるとして、グリーンは論証するのである。この人間性を蹂躪する論理が、じつは、ヨーロッパの近代を作り出したものであろうし、その非人間的な赤い傷口をグリーンは、「ものの本質」に於いて数学的厳密さをもって示すことに成功しているのである。